

〈新刊紹介〉

杉原薫・玉井金五編

『大正／大阪／スラム —もうひとつの日本近代史—』
(新評論, 1986年)

真 実 一 美

I

本書は大正期の大阪におけるスラムを、世界資本主義に占める日本資本主義との関連から描きだそうとする意欲的な試みである。このような視点の背後には、「あとがき」で触れているように、今日の開発途上国の急速に膨張しつつある大都市の深刻な都市勤労貧民 (urban working poor) の問題、すなわちインフォーマル・セクターへの関心とこれらの諸国と同様におくれて工業化に着手したにもかかわらず、先進工業国となることができた日本への注目がある。本書の構成と執筆者は以下のようにになっている。

序章 課題と方法 杉原薫・玉井金五

第1章 日本における近代的労働＝生活過程像の成立 一字野利右衛門と工業教育会の
思想— 杉原薫

第2章 日本橋方面・釜ヶ崎スラムにおける労働＝生活過程 木曾順子

第3章 都市部落民の労働＝生活過程 一西浜地区を中心に— 福原宏幸

第4章 1920年代における在阪朝鮮人の労働＝生活過程 一東成・集住地区を中心に—
佐々木信彰

第5章 在阪朝鮮人の渡航過程 一朝鮮・濟州島との関連で— 杉原達

第6章 日本資本主義と<都市>社会政策 一大阪市社会事業を中心に— 玉井金五
あとがき 玉井金五

まず序章で、本書の問題提起と理論的枠組みが簡潔に示されている。第1章は大阪の近代的工場部門について、伝統的支配原理を利用した労働者の管理について検討している。

そして第2章以下がスラムに関連した問題を扱っている。第2章から第4章まで、大阪のさまざまなスラム地域、つまり伝統的貧民窟、部落民および朝鮮人居住地域を労働＝生活過程を中心に詳細に検討している。第5章は当時の大阪における朝鮮人労働者の主要な供給源であった済州島からの渡航過程について述べている。第6章は工業化の進展にともなうスラムの再編・拡大と近代のスラム問題の登場に対処した大阪市の先駆的事業について論じている。

それでは序章から順次内容をかいつまんでみていこう。序章では、まず次のような問題提起がなされる。大正期の大阪は、世界資本主義システムの中での従属的位置から脱しつつあった日本資本主義のひとつの核であり、「東洋のマンチェスター」と呼ばれた。当時急速に発展しつつあったこのアジア最大の商工業都市にあっては、いわゆる近代的労働者は多数者ではなく、「都市雑業層」的な、日雇労働者のような「スラム生活圏」に生活する人々こそ多数者であった。このような労働市場の「二重構造」, 「一般労働市場」と「スラム労働市場」の分断は、これまでも議論されてきた「一般労働市場」内部における二重構造とは質的に異なるものである。この「スラム労働市場」の労働者はいうまでもなく「スラム生活圏」で生活していたのである。そして生活空間のセグレーションが、労働過程とともに生活過程の分析を要求していることはいうまでもない。さて、この「スラム生活圏」の労働者は近郊農村や被差別部落、九州、沖縄、朝鮮などから流入してきたという。本書の目的は、このような大正期大阪の代表的スラムの労働＝生活過程をできるだけ総合的に描きだすこととされている。序章は、全体の理論的枠組みを示すというきわめて重要な章なので、もう少しみておきたい。「スラム労働市場」の確定は「スラム的生活水準」を基準とするというように生活過程に則して考えられている。これは、今日の開発途上国のインフォーマル・セクターのそれと類似していて興味深い。具体的にはさまざまな日雇労働者、中小零細企業労働者、彼らの妻子、屑拾いのようなさまざまな一応「自営」というべき「雑業」が含まれている。妻子が含まれていたことは、この労働市場が自立的な労働力再生産構造をもっていたことを示している。またこれらの労働者は職業・居住地域差別を受けていた。これは彼らの中に被差別部落や朝鮮の出身者が含まれていたということもあるが、近代スラムの差別はそれまでの血縁・出身地差別とは異なる近代的な職業・居住地域に基づく「近代的」差別であるとしている。そしてこのような理解から行政の社会政策を融和主義、同化主義的対応としてとらえようとしている。

第1章は宇野利右衛門という一経営コンサルタントの思想と活動をとおして大正期の日本の労務管理の形成過程を考えている。彼が対象としたのは「一般労働市場」の労働者だが、この検討により以下の章での「スラム労働市場」の実体を逆照射することを狙っている。宇野は忠誠心や家族制度の因習といった伝統的原理を利用しながら、労働者を近代的工場制度の規律に従わせようとした。その際労働者の功名心に訴えるなどして、彼らを相互に競争させた。また労働過程のみならず生活過程全体の管理も重視した。このようにして、比較的短期間に近代的労働者への意識変革がなされたのである。第2章から第4章は、日本橋方面・釜ヶ崎、西浜、東成の鶴橋・中本方面（朝鮮町、猪飼野）のスラムの労働＝生活過程が詳細に検討されている。続く第5章とともに、本書の核心部である。これらの章はさまざまな興味ある事実を紹介しているが、ここではその大部分を省略せざるをえない。このうち日本橋方面・釜ヶ崎のスラムは江戸時代からの貧民窟である。もっとも釜ヶ崎の方は周辺から流入する日雇労働者を中心とする木賃宿の街である。これにたいして、残りの二つはそれぞれ被差別部落民と朝鮮人が多数を占めるスラムである。スラム居住者の重要な一翼をこれらの「封建社会」における特定の身分集団や植民地朝鮮という特定の地域からの出身者が占めていたことは興味深い。また同様に劣悪な生活条件のスラムに住み、低賃金で過酷な労働に従事していたとはいえ、職業には微妙な相異があった。日本橋・釜ヶ崎では「鮫鱈」と呼ばれる日雇労働者や屑拾いのようなリサイクル産業に従事するのが多く、子供たちはマッチ工場などで低賃金労働に従事していた。なお児童労働はどのスラムにも共通にみられた。西浜では被差別部落の伝統的職業である皮革及び関連業種が過半数を占めていたが、農村部落からの人口流入とともに雑業・力役の比重が次第に高まってきた。東成の場合は土方、零細な町工場の職工、さまざまな雑役に従事する日雇労働者が主な職業であった。職工は居住地近辺の中小零細工場で働く鋳物工、鉄工、鍛冶職、ゴム工、セルロイド工、ガラス工などの長時間、過激、不快、低賃金の労働に従事していた。これらの特定の低賃金の職種への集中は、「一般労働市場」から疎外されていたことによる。彼らの居住地域も、他の地域から隔離されていた。ここで興味深いのは、ここでの生活費（食費、住居費など）が必ずしも安価ではなかったことである。また西浜では、差別が伝統的なものから「資本主義社会の差別メカニズム」をつうじた能力による区別・選別へ変化し、それと並行して少数の富裕層と大多数の貧困層への両極分解が生じたと指摘されている。第5章では大阪の朝鮮人の大半を占める（1934年、75.8%）済州島からの渡

航が検討されている。併合後、大阪などの企業により職工の募集が行われ移民が急増するが、大正末期には血縁・地縁をたよった「連鎖移民」(chain migration)へ移行する。第6章は1920年代に体系化された大阪市の社会政策を論じている。これは失業、貧困、スラムなどの都市問題に対処するもので、シヴィル・ミニマム思想に基づき、簡易食堂、職業紹介所、市営住宅、市民館、公設市場など生活過程対策を中心としていた。

II

さて本書について若干の感想を述べてみたい。本書全体を貫く問題意識は二つあるように思われる。一つは、なぜ後進資本主義国として工業化に乗り出した日本が、世界資本主義システムのなかで、他の多くのアジア・アフリカ・ラテンアメリカ諸国とは異なって、従属的周辺部から脱出しえたのかということである。もう一つは、この日本資本主義の発展に、「スラム労働市場」がどのように貢献し、どのように位置づけられるのかということである。そして日本の経験は、今日の開発途上国のインフォーマル・セクターや先進国の移民労働者というトピカルな問題にもつながるものを持っているだろう。本書は以上のような問題意識をもちつつも、実証的にスラムの労働＝生活過程を検討することに力点を置いている。したがって本書は性急に一般理論の構築を目指してはいないし、このような実証的手法はまだ緒についたばかりの「スラム労働市場」の研究姿勢としてはむしろ好感がもてる。しかし今日の開発途上国を研究するものとして、評者はインフォーマル・セクター、国際および国内労働移動との関連でいささか性急な感想を述べてみたい。

まず日本資本主義の「特殊性」をどのように理解するかということだが、いうまでもなくこのような大きな問題は一つや二つの要因だけで説明できるものではない。しかしいくつかの要因を選びだすことよりも、それらにどのようなウェイトを与えるのか、それらの相互関係をどのように理解するのかということのほうがより重要であろう。本書の第1章は日本的労務管理の形成と定着を日本の経済発展の一大要因としている。そして第6章で扱われている市行政の社会政策は、融和主義と同化主義のイデオロギーに基づきつつ、工業化の進展にともなって激化しつつあった都市問題、とりわけスラムなどの貧困問題に対処するものであったという。日本資本主義の発展において伝統的な社会的諸要因を近代的労働力の陶冶に巧みに利用してきたこととか、行政の側でこの過程で生じる社会的緊張関係、つまり社会問題に的確に対処してきたことなどが重要な役割をはたしたことは否定し

えないであろう。しかしこれと同様に、あるいはそれ以上に、当時の日本の置かれていた国際的環境すなわち世界資本主義システムにおける日本の位置が決定的な意味をもっていたように思われる。国家が経済過程にきわめて大きな影響力をもっていることからすれば、独立の維持は非常に重要である。たしかに今日の開発途上国のすべてが植民地化の歴史的経験を有するわけではない。例えばタイやネパールは西欧諸国の植民地にならなかったし、18世紀半ばから19世紀半ばのいわゆる産業革命の時代には、ラテンアメリカ諸国はすでに独立を達成していた。それゆえ国家権力の保持だけでは工業化の成功を十分に説明しえないが、これは必要条件として、前提条件として理解されるべきものであろう。この条件が満たされてはじめて他の経済的な諸要因が効果を発揮しうるのである。とりえずここでは、植民地朝鮮が安価な「スラム労働市場」労働力の一供給源であった、植民地支配が安価な労働力の供給を可能にしたという事実に注目しておきたい。そしてこれについては、当時の大阪のもう一つの低賃金労働者の供給源で「半植民地」的な位置を占めていた沖縄の出身者の分析が欠如していることは残念である。

つぎに「スラム労働市場」の意味について考えたい。序章で「二重構造」の存在が指摘され、「スラム労働市場」の量的大きさが強調されていた。そして第2章から第5章では「スラム労働市場」が、近代化・経済発展を牽引した近代的工業の建設と「一般労働市場」の形成を、基底において支えていたことを詳細に描写している。この「二重構造」の指摘と「スラム労働市場」への注目は重要である。一つは、このような「二重構造」は資本主義にとって必要不可欠な存在ではないかということである。もう一つは、分断されてはいたが、二つの労働市場は生産や消費などを含む経済構造全体としては相互に有機的関連をもっていたことである。本書に則して述べれば、当時の日本の主要な輸出品であった雑貨はこのような低賃金労働によって支えられていたし、リサイクル産業も都市の発展を支えていたといえよう。つまり「スラム労働市場」は閉鎖的であったが、低賃金労働や安価な工業原料などの投入財、一般労働市場の労働者のための消費財、サービスを供給することで全体のメカニズムに組み込まれていたのである。今まで充分な注意を払われてこなかった「スラム労働市場」に注目し、これを聞き取りなどを含む詳細な実証分析で裏付けた意義はきわめて大きい。

評者は本書を読みながら、今日の開発途上国のインフォーマル・セクターや先進国の移民労働者の問題と多くの現象が重なっているように思われてならなかった。本書に扱われ

ている大正期日本の「スラム労働市場」と、開発途上国のインフォーマル・セクターや先進国の移民労働者の労働市場は、形成の時期、原因、過程などにおいて多くの相違をかかえている。しかしながら、これまでもしばしば指摘されてきたように、これらには現象面では多くの共通点が見られるのである。そして評者が感じたのは、時間的、地理的な隔たりにもかかわらず、むしろこれらの諸現象は根底でつながっているのではないのだろうかということである。要するに資本主義にとって差別的労働市場は必要不可欠であり、これを創出するためには労働＝生活過程の分断化が不可避的に要求されるのではないだろうか。ともあれ本書はきわめてスケールの大きな構想に基づいて日本の工業化過程を再検討しようとし、そのことによって今日の世界を照射しようとしたものであるといえよう。